みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

A Hakka Ethnicity or the Chinese Civilization "Zhong Hua"? : Many Problems about a Hakka Ethnicity Discussed from 1970-80 Years of My Field Experiences

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 欣雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009521

河合洋尚・張維安編『客家族群與全球現象』
国立民族学博物館調査報告　150:31–48(2020)

客家と中華
―1970～80年代の調査体験から

A Hakka Ethnicity or the Chinese Civilization “Zhong Hua”?:
Many Problems about a Hakka Ethnicity Discussed from 1970–80 Years of My Field Experiences

渡邊欣雄
WATANABE Yoshio

Abstract: In 1978, I visited Taiwan to conduct a study on the Han Chinese people and discovered the existence of the Hakka, a sub-ethnic group of the Han Chinese. Then, I learned from previous research that the Hakka have their own history and culture. Subsequently, I conducted a study in the Liudui Hakka district in the southern part of Taiwan for nearly a decade, from 1978 to 1988. My on-field conversations, previous research, and the various data I gathered emphasized that Hakka culture was unique in various ways. However, after this study, I conducted a comparative literature review of the entire East Asia region. The results indicated that much of what I had discovered in the Hakka district was indicative of a common culture that transcended borders between countries and ethnic groups. For example, various religious cultures that were considered unique Hakka folk religions undeniably exist in other ethnic groups (e.g., worship of the Lords of the Three Mountains). Features of Feng Shui (Chinese geomancy) that were important to the Hakka were also common across East and Southeast Asia. Thus, my research on Hakka provided me the opportunity to learn about not only Hakka culture but also “Chinese culture”; namely, the characteristics of different Chinese cultures across a broad section of Asia; I further expanded the horizon to include ethnic Chinese cultures worldwide.

1　自己紹介

わたしの自己紹介を兼ねまして、わたしの主として「客家」研究に関係する肩書きを中心に、まず紹介しておきたいと思います。現在は退いておりますが、以前「日本国際客家文化協会副理事長」を担当しておりました。以下、台湾の「『客家研究期刊』顧問委員会委員」を担当し、大陸では「贛南師範学院客家学刊編輯委員会学術顧問」に任じておりました。客家研究者として、現在も肩書きがあるのが「嘉応大学客家研究院客員教授」と「嘉応大学客家研究院学術顧問委員会委員」です。

客家研究に関しては、ちょうどわたしは今年で40年目になりますでしょうか。したがいまして本日は、とくにわたしの客家研究初期の時代から紹介して、その後のわたしの客家研究がどうなっているかについてお話ししたいと思っています。

2　先行研究に従った時代

わたしが最初に調査を行ったのは1978年で、台湾南部の客家居住地域に行ったわけですが、当然、最初の頃は客家研究における先行研究ですね、自分の研究よりもっと前にあったさまざまな研究を、まずは読まざるを得なくて、それで最初の頃はずいぶん先行研究を読みあさりました。その一つが有名な羅香林の『客家研究導論』（希山書蔵刊）でした。この本は1933年に出た本ですけれども、かなり時代が経った1970年代当時においても、たいへん重要な客家研究の原典とされていました。だからこの本を読まないと客家研究にならないような、そんな雰囲気の時代が日本の学術界にもありましたし、台湾の学術界でもそうでした。

さて、図１に書かれているような、これは羅香林の先の導論に描かれ、その後よく用いられた客家居住地区の分布図です。つまり客家人が今日居住している地域はどこであるか、そして客家人とはどういうような「民系」（こんにちの中国語では「族群」）であるか、つまりエスニックグループであるかということが、この本の中に書かれておりました。とくに注目すべき羅香林の主張は、「五胡乱華」すなわち４世紀の頃、北方の諸民族によって漢王朝が滅ぼされたときに、華北に住んでいた漢民族は難を逃れるため南下して移住せざるを得ず、以後、隋唐期の879年までに、第一次の南下移住が行われたとする説です。その後、さらにいくつかの時期にわたり、避難民が南に下って移住して

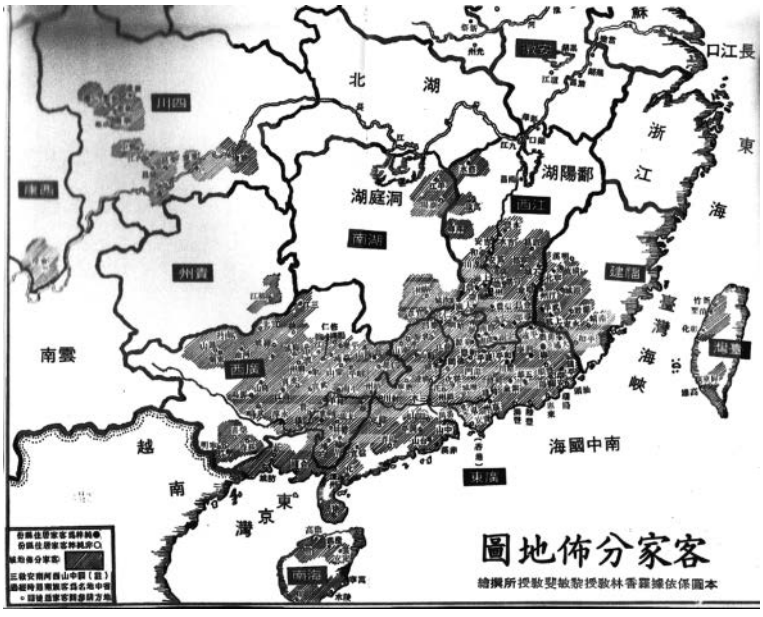

図１　客家人の居住地域（羅 1933: 98）

いくような歴史があり、最後に台湾に渡ったという羅香林説があったわけです（羅 1933）。

わたしはその当時、こんなに深い、言ってみれば1000年を超えるようなエスニックグループの歴史が復元できるというのは、たいへんな驚きでした。例えば日本史そのものではなく「日本民族の歴史」について、これほど長期で詳細な歴史が書かれたものがあるかと言いますと、日本には推測の民族史しかないと思います。当時、わたしが習ってきた石田英一郎先生とか、日本民族の起源論で有名だった岡正雄先生の説では、羅香林ほどの詳細な証拠がなくて日本民族の起源について盛んに論じられていたわけです。羅香林が客家史の根拠としたのは「族譜」でした。この家系図が証拠になって客家の移民の歴史が復元できるなんて、わたしにとっては当時、たいへんな驚きであったわけです。いまでは家系図そのものが後々の時代に創造されたものであり、あまり歴史的事実を反映していないことはわかっていますが、当時のわたしには「族譜」を批判的に検討するなどという能力も姿勢もありませんでした。

だから羅香林説、および羅香林説に従って立論するような当時の客家人・客家文化紹介書を、もちろんわたしは進んで読破学習していたわけです。では当時の説に従うと、いつ頃台湾に客家の人たちが渡ったのかというと、まず1661年の鄭成功が台湾を平定して以後で、とくにこの客家遷徙路線図にありますように、1682年、大陸からの移民が台湾上陸後、客家の人たちは南のほうから北上したと言いわれています（図２）。したがって台湾の中でも客家の歴史は屏東県の近く、つまり南部の人たちのほうが歴史が古いというわけですね。それでわたしも、その地域に行ったわけです。台湾に渡った漢民族というのは泉州出身者か漳州出身者が多く、かれらが大多数の人たちであります。図３に掲げてある図は、日本植民地時代に植民地政府が作った分布図を元にしていますので、「福建省系」「広東省系」という当時の分類のままを載せていますが、とはいえ、わずか客家の人たち16％が、台湾の南のほうに上陸して北上したとされているわけです。漢民

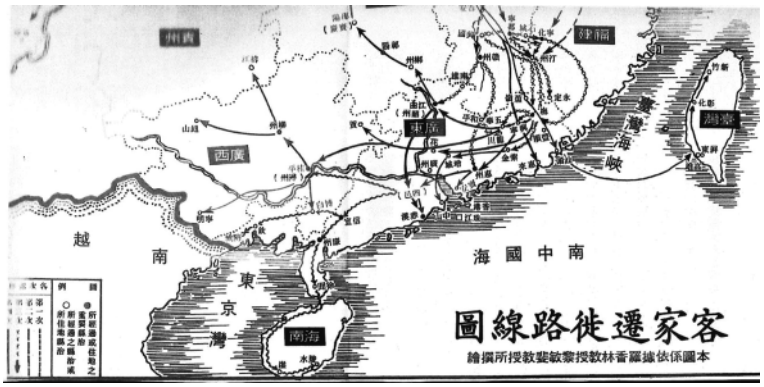

図２　客家遷徙路線図（陳 1978: 46）

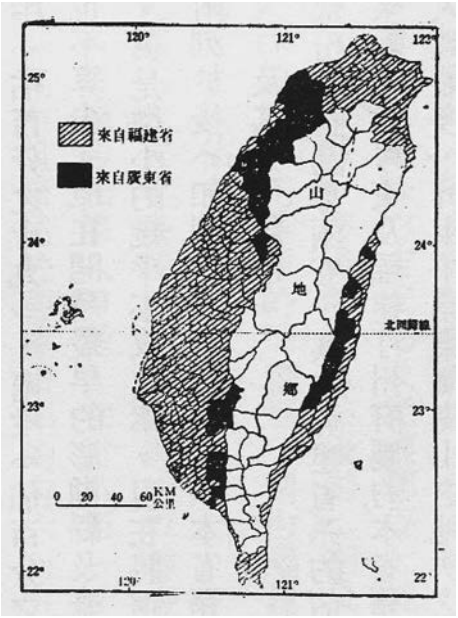

図３　福建省からの移民、広東省からの移民分布図（陳 1978: 122）

族の系統でいくと、統計作成の時期により違いはあるが、おおかた泉州系45％、漳州系35％、すなわち閩南系がおよそ80％というような移民の比率のようであり、決して客家人は移民した漢民族の中でも多い人口ではありません。台湾における客家人居住分布図も陳運棟（1978）さんの本の中に書かれているものでは、「六堆」の地域に客家人居住地区はありますが、それよりも苗栗から新竹にかけてのこの地域に客家人のグループが多い。そして、わたしはわずかな期間しか行っていませんが、台湾の東海岸のほうにも客家人の居住地区があるわけです。

というようなことは、すでにその当時、陳運棟ほかいくつかの先行研究というか、そういう客家人紹介書がありました。わたしはですから、何としてでも客家の上陸地付近に行ってみたいということで初訪問したのが、台湾南部の「六堆」地域だったわけです。しかも六堆の中でも、いちばんの中心地である「中堆」と称する地域でした。この地域一帯が客家の人たちにとってなぜ「六つの堆」なのかというと、その点について鍾壬壽さんの本の中に理由が書かれているわけです。移民した初期には、南部客家の人たちだけでグループを形成することはなかったんです。ところが1721年に起きた朱一貴の乱があって、それで「六つの（部）隊」をつくって乱に対抗したというのです。中国の共通語で「リゥトゥイ」です。「六隊」と「六堆」は中国語で同じ発音で、初めは民兵の組織みたいな部隊を作って、自分たちの地域を防衛したということで「六隊」でした。しかし内戦状態がなくなったもんですから、字を変えて「六堆」（六つの山、六つの群）にし

たと言われています。わたしが下宿して生活していた当時、「六堆」の団結心は非常に強く集会が多くて、言ってみれば「文化ナショナリズム」というか、「客家（人）とは何か」、「客家（文化）とは何が特徴か」などということが、非常に明確に語られていた時代でありましたし、わたしも論文その他、客家人や客家文化の紹介を書けば、現地ですぐ翻訳されるほどでした。まさにわたしの論文は、客家の人々による「文化ナショナリズム」のために有効に用いられていたわけです。

明確に語られていた「文化ナショナリズム」の一つの例として挙げたいのは、以下のような内容です（鍾編 1973）。みなさん、以下のような主張を、現在どう思われるかということですが、例えば①言葉として客家語というのは、中国語の古語・古音を残しているという説です。この点について現在、言語学のほうで、どのような評価になっているのか分かりませんが、わたしが訪れた時代には影響力のある説でした。つぎに②客家人は向学心があって教育を重んじ、多くは孔子を崇拝して儒教を信じているということ。このような主張があったわけです。そうすると、客家人以外の隣人である閩南人は「客家人に比べて向学心がなく、教育も重視せず、孔子も儒教もあまり信じてない」ということになるでしょうか。また③「客家山歌」です。「客家山歌」については、当時、よく歌も話も聞くことができました。しかし「客家山歌」と言わず、「山歌」そのものは中国各地の少数民族の歌として、ほとんどの民族が持っていますね。当時、こういうような独特な歌があったということが、客家人独自の歌だと言われておりました。

さてさらに当時の説をわたし自身が紹介することを、ちょっと困惑しているですが、④客家人は祖先祭祀を非常に重要視し、それから祖先の遺骨を大事にして運ぶ習慣があるのだという主張です。この主張については、わたしは批判したいのですが、この主張を是とすると客家人以外の人は祖先を重視せず、遺骨も運ばないということになる。閩南人はそういうことしないと…。でもあの当時、わたしはそれを是認して考えていました。「客家人は立派だなあ」ということですね。それから⑤客家人は宗族を重視して家法を重んじており、だから祠堂・族産管理団体が最も多いのだというような主張です。だから客家人だけが「宗族」という父系の出自集団を持っていて、他の族群は持っていないということになりますでしょうか。それからさらに⑥客家人は非常に清潔好きであるし、⑦男子同様に婦人を重んじており、子供の養育を重んじていると。加えて⑧客家人は開拓精神に富んでいる。続けて⑨漢族の姓を全て持っている。そして最後に、多分、客家という意識が外側から与えられた可能性が非常に高いのは、最後の主張にあるようなことなんですね。すなわち⑩ヨーロッパやアメリカの研究者たちから、客家人というのは中華民族の精華、つまり中華民族の中でいちばん中心的なエスニックグループであり、「純粋な漢民族」なのだとされている、としていることです。この主張は、「文化ナショナリズム」以外の何ものでもない典型例です。

3　みずから客家文化を知ろうとした時代

こういうような多くの主張が当時存在したわけですから、わたしが当時行っていた客家研究というのはたいへんすごいんだ、価値あることなんだと自分で感激しておりました。つまり中国（台湾）の代表的で典型的な、他の漢民族にはないような特徴が、これだけたくさんあるようなエスニックグループを研究しているんだということをわたしは自認していて、客家人を知ることによって漢民族全体を知ることになる、ということを自覚したんです。それで再認識したのが「六堆」の客家地区だったわけです。毎年台湾の「六堆」地区に行っていたのは、この10年（1978〜1988年）でありました。とくにわたしが客家の研究をするときに、漢民族を代表しているわけだから客家文化が非常にわかりやすいという点で、たいへん幸いだったんです。

わたしが台湾に行っていた時代は、台湾は戒厳令下だったわけです。だからとくに外国人に対して警戒していて、日本人なんかを農家に泊まらせるなどということは、とんでもない話だった時代なんです。ところが、わたしは不幸中の幸いで、内埔村及び頭崙村、とくに頭崙村はわたしの調査地になりましたけれども、なんと現地の人が農家に泊まらせてくれたわけです。では、外国人が農家に泊まるときにはどうしたら良かったのかというと、まず警察署に行って、しかも泊めてくれる農村の人にも一緒について来てもらって、「何日から何日まで泊まるからよろしくお願いします」ということを警察に告げパスポートを見せて、いちいち記録ノートに名前を書いて許可証を得て、そして初めて泊まることができました。それを毎年、繰り返していました。ですから、非常に外国人には厳重な時代でした。それから写真を撮ってはいけないような場所がたくさんあった時代です。それでも、もちろん農家に泊まることができたわけですし、それから美濃地域、つまり南部客家人にとっては北のほうで街中でしたが、そこでも個人宅に泊めてもらって調査ができたわけです。現地の客家の人々の、わたしに対する親切以外の何ものでもありません。

調査の例をいちいち挙げると、お話しのテーマとはあんまり関係がなくなりますので詳しく話しませんが、わたしの調査地＝頭崙村は当時、非常にきれいな水田地帯の中に浮かんだ島のようでした（写真１）。わたしは三合院住宅の１室に寝泊まりを許されたわけですが、そこを借りて生活をしておりました。ちょっと恥ずかしいお話、とんでもない格好しているので台湾の人に写真を撮られたわけですけれど（写真２）、現地で購入した傘帽子をかぶり、借りた自転車に乗って、村々を訪問しながら聞き取り調査をしておりました。

「中堆」という六堆の中心部に「忠義亭（忠義祠）」があって、ここは戦前に『嗚呼忠義亭』（松崎 1935）という本が出ているほど有名だったところです。「六堆」地区の団結の中心部なので、たびたびそういう集会があって、よくわたしもここの集会に参加して

写真１　調査地の一つ美崙村。頭崙村も近傍にある（1979年、筆者撮影）

写真２　自転車を借りて調査中のわたし（1979年、撮影者不明）

おりました（写真３）。また集会といえば、玉皇上帝の誕生を祝うお祭りの中でも精進料理を食するお祭りがあり、そんな集会にも参加しておりました。さらに「六堆」には運動会があって、それにも参加したことがあります。

そのような方法で現地調査を行い、それから農家に泊まることができましたので、幸いいろいろな行事、例えば毎月、鬼を追いやる行事ですけれども、そういう行事を観察

したり、祖先祭祀の行事もお正月や中元節などによく行われる行事ですが、祖先の位牌を目の前にして、子孫たちがたくさんの供物を供えるような行事を観察することができました（写真４）。また正月には玉皇上帝といって漢民族の最高神、この名称を使うのは道教とこの客家地域、それに大陸の福建省の一部ですけれども、最高神を拝むような、そういう行事を調査することができました。わたしのお話で「調査」とか「観察」とか言っておりますが、しかし実際わたしにとっては「学習」であり「勉強」だったわけです。

写真３　忠義祠（忠義亭）での集会風景（1979年、筆者撮影）

写真４　中元節の家庭内祖堂での祭祖風景（1979年、筆者撮影）

それから春ですけれども、これはうちの家内が、あっ、家内と一緒に台湾に行ったんですね。なぜかと言うと、1人で行くとスパイと思われるので、夫婦で行けば政府にそんな誤解はないだろうという憶測に基づいたこちらの対応です。それで女房も連れて行ったわけですが、ちょうど4月のお墓参りの時期でした。天秤棒を担いで供物を運んでいた時代が台湾にありました。そして日本では「洗骨」と言っていますが台湾では「撿（チェン）骨（クゥ）」ですね。埋葬した祖先をもう一回掘り出して、骨を拭いて骨壺に納めるという風俗習慣があったわけで、このようなこともこの時期、ちょうど4月の清明節の時期に行われていました。

それから正月の行事についてはわたしも論文を結構書いてきたわけで、正月を迎える前に正月の飾りを扉に飾ったり、正月料理用の豚肉をトラックで村に売りに来て、そこでみなさんが路上で購入していくわけですね。正月は、こういう発酵させたお餅、ポパンっていうんですけれど、そういうお餅を手作りしているような、当時は家庭で餅を作っていたわけです。今は工業製品化しているかもしれません。こんな行事も見ることができました。三合院の家の中では各部屋に家庭があり、そこで毎日、食事を一緒にさせてもらったんですが、ちょうど「年三十」という大晦日の晩に、一家だんらんの食事にも、わたしたちは招かれて過ごさせていただいたわけです。さらに正月や元宵節には、獅子舞や村の中におけるさまざまな神様のお祭りにも参加して、それをいろいろな論文に書いてきたわけです。

4　客家人の文化を知って先行研究を疑った時代

そうやって何度か調査をした後に、1980年代から現代に至るまで、途中1991年に日本語の研究書『漢民族の宗教』（渡邊 1991）という本を出版したわけですけれども、調査を重ねていくうちに、これまでの先行研究における主張、例えば「客家人にしか宗族という組織はない」とか、「漢民族で客家人以外、祖先崇拝はしていない」とか、「祖先を大事にして骨を拭いているのは客家人だ」とか、それから「客家人こそ儒教を重んじている」とか、そういう一連の「文化ナショナリズム」に対するわたしの疑いが生じるようになったわけです。なぜかと言うと、調査地では確かに書物に書かれたようなことをもちろん行事などとして行っていましたが、同時に台湾に行けば閩南人も同じようなことを行っていることが観察できたし、さらにわたしは香港でも調査しましたが、香港の人も行っていることがわかりましたし、さらにさらにマレーシアでも華人の調査をしましたけれど、マレーシア華人社会でも、ちゃんと祖先崇拝などをやっていることがわかりました。

そうやって世界各地の中国人や華僑・華人社会の調査を経験すると、「客家独自の文化がある」というような「文化ナショナリズム」に基づく、そういう書き方は間違ってい

るのではないかという疑いが生じて来たわけです。非常に困惑したのは、客家の人たちから話を聞いて、「これが客家の文化だ」というのを非常に強調して話してくれたこと自体が、似たような文化が他の地域の漢民族にたくさんあるじゃないかということの、わたしの疑問を増長させるような原因になっていたことです。「文化ナショナリズム」というのは、そういう弊害があるのです。それがわたしにとっての客家研究の、いちばん困難な時代を作ってきました。どうしたらいいのだろうか。つまり客家人の文化はむろんさまざまな特徴があったわけだけれども、その特徴をかれらに聞けば聞くほど、わたしの知る他の族群の地域にも同様の文化があることが、わたし自身には獲得された知識として蓄積されていったわけです。例えばということで例を挙げると、以下のようなことです。

第一に、台湾においてはとくにに三合院住宅という住宅形式が普遍的に存在していて、客家地域にも閩南地域にもあることは、客家の人たちも生活の上でよく知っていました。しかし屋根の形が違うとか瓦の文様が違うというような、客家には独特な三合院形式の住居があるんだという話を聞いたんです。その後、何年か経ってわたしは大陸の閩南地域である泉州その他に行って調査をしました。大陸の閩南地域一帯は三合院だらけで、しかもバリエーションも豊かで、台湾で「客家特有の民居の形や飾りだ」だと言われていた形式も全部認めることができました。だって三合院住居の数が台湾とは圧倒的に違うわけですから。大陸のほうが三合院の数で見ると、断然多いわけです。これでは台湾客家の住居の特色にならない。と言いますか、客家居住地域とされる閩西地域の住居には、ほとんど三合院住居がないというようなことが分かりました。これらはいろいろな紹介書にも出ています。この点が現地の客家の人々に聞いた「客家文化の自画像」と、実際との第一の大きな違いでした。

第二に客家の人々の文化の自画像と、実際との違いが発見できたのは「風水」でした。現在わたしは風水思想の研究をしている最中ですが、わたしの風水研究事始めも、客家の人たちが「地理風水とは何か」について教えてくれたからです。それまでは「風水」の意味さえわかりませんでした。現地で十分な風水の話が聞けるほど、たしかに風水を客家の人たちは重視しているわけなんですが、客家文化の紹介書に次のようなことが書いてありました。「世界中どこを見ても、客家の住居のように、風水術と強く結びついている民家はないと言える」(林 1996: 157)。このように「客家人が世界でいちばん風水を重視している」という書き方や言い方をしている研究書を見ると、もちろん批判せずにはおれません。わたしは台湾や中国大陸ばかりを調査してきたわけではない、それ以前には沖縄や韓国、さらにマレーシアやベトナムなど非客家地域で、かつ地理風水を重視している地域で調査をしてきました。風水を重視している地域は、日本本土を除く広域東アジアにたくさんあるわけです。これが、客家の自画像と実際とが大きく違うと感じた第二の例でした。

それから第三についてですが、こんな説がありました。客家人は、長年、中原から南下して移民の生活を送ってきたがために、祖先の遺骸を移民先に埋葬しても、かならずそれを掘り出して改葬し、遺骸を持ち運ぶのだという説です。運んで遺骨を埋めてしかるべき土地、たとえば祖先の故郷にかならず埋葬してきたのだと。それが客家地域に広く伝わる「撿骨」であり「拾骨」の文化なのだという考え方も、わたしは台湾に滞在中、何度か聞きました。しかしこの文化は、わたしの調査経験から見ると、そもそも沖縄の特徴とされてきた「洗骨」の特徴ですし、わたしが本で比較したことのあるマダガスカルやアメリカの先住民にも認められるような普遍的な文化の一つです（渡邊 1993）。だから、決して客家文化の特徴だとは言えないわけです。

それから、とくに客家に関するいろいろなシンポジウムに出席してみると、よく「客家人は三山国王を重視して祀っていて、その神こそ客家人の特色ある神様だ」という報告を聞きましたけれども、その後、大陸の潮州地方に行きましたが、三山国王を祀った廟は大陸の潮汕地域にたくさんあるんですね。客家地域より以上に、潮州人が多く住む地域に三山国王廟がたくさん見られたわけです。ここまでのお話しの例を非客家地域と比較した例として、ちょっと写真でお見せしたいと思います。

これは台湾でお話を伺った客家人の風水師が墓の風水を見ている写真ですけれども（写真５）、浙江省でももちろん風水判断は非常に重視しておりますし（写真６）、沖縄でもちゃんと羅盤を見て風水を判断しているわけです（写真７）。風水というのは、実は「中

写真５　墓穴の風水判断をしている台湾美濃の風水先生
（1997年、筆者撮影）

写真６　墓の方角を判断している浙江省温州の風水先生（1995年、筆者撮影）

写真７　沖縄久米島の大工さん。風水の知識を持っている（1999年、筆者撮影）

華文明」の普及した文化の問題に属するものなんです。だから、客家の人びとの自画像の話を聞いてわたしが分かったのは、客家だけではなく「中華」という東アジア全体の問題に通じる内容なのだということでした。

また祖先の骨を運ぶことが客家の伝統文化なんだということは、たしかに美濃地域で見たわけですが（写真８）、同時に香港地域だって写真を見れば分かるように、「執骨」（洗骨）を実行しているじゃないですか（写真９）。ただし香港では遺骨を丁重に水で洗

写真 8　家族で行う台湾美濃の撿骨改葬風景（1998年、筆者撮影）

写真 9　墳場管理員が行っている執骨改葬風景（1983年、筆者撮影）

っていますし、沖縄でも水洗いするわけですね。こういう特定地域や族群を超えた文化を何と言ったらいいか。「客家文化」と言ってはいけません。これはまずは「中華」という次元の問題として考えないといけない。もちろん「中華」以外のマダガスカルだって、アメリカの原住民だって行っているわけですから、このような問題は、人類学がもっとも得意とするグローバルな文化の研究に属するわけです。

それから最後に、「義民廟」（義塚）の問題です。これは美濃の義民廟です（写真10）。

廟の奥に入っていくと、無縁仏の遺骸が納められているわけですが、こういう風俗習慣というのはもちろん大陸の潮州地域にあるし（写真11）、それからもちろん梅州にも「厲壇（リータン）」と称する無縁墓があって死者が祀られております。ですから戦死者から無縁の霊を祀る墓を「義民廟」とか「義塚」というならば、台湾を含めた中国大陸南部全体の一般的な風俗習慣といってもいいんじゃないかということが、しだいに分かってくるわけです。

写真10　無縁仏を祀る廟（義塚＝有応公廟）。台湾南部（1997年、筆者撮影）

写真11　広東省潮州にある無縁死者の墓（義塚）（2009年、筆者撮影）

5　飲水思源 ── 客家研究から中華文明の研究へ

客家の人々に話を聞いて「これが客家文化の特徴だ」と聞いた内容の大部分が、実際にはほかの地域にも存在していることが分かったということ。わたしがまだ、先行研究のように「客家独自の文化」を見つけようと悩み続けていたら、とうてい「客家研究」にならないですね。客家の人に話を聞けば、客家文化のことは分かるけれども、それと同時に、もはや他の地域との比較の目を持っているわたしには、「中国」や「漢民族」の文化をも分かってしまうことで、わたしの研究をもう一回見直そうという時期がありました。

「飲水思源」というこの言葉、中国では有名な言葉ですけれど、「水を飲めば源を思う」ということ。水というのはもともと源流から始まったのだということで、もう一回、自分の研究を始めに帰って見直してみようという時期が、わたしの最近の時期です。

わたしのいまの考え方はこうです。「客家を知れば中華が分かる」ということです。中国が分かるのではないんですね。「中華」というのは何を含めるかというと、日本をも含みます。日本とか、沖縄とか、韓国とか、ベトナムとか、それからモンゴルとかいうような地域を含めて考えたい。「中華」はもちろん「華」の中の中心ですから、だから「中華」は日本ではないけれど、その中華に影響を受けてきた周辺の「華」（文明）こそ日本にあるわけです。沖縄にもある、韓国にもある、モンゴルにもあるということを、客家の人たちは知らねばならないし、わたしは客家の人々から学んで、このようなことが分かったんですね。「中華」とわたしは言っていますけれども、要するに日本を含めた共通文化＝東アジア文明という、その内容が客家文化の中に見られるわけです。だから、客家文化というものを知れば日本文化が分かる。そんなことが分かってきて、いよいよわたしのグローバルな研究になってくるわけです。

以上については、わたしがいま考えていることなんですけれども、わたしの初期の客家研究から分かってきていたのは、客家文化は「漢文化」だという次元でした、それはわたしに限らず、多くの人が是認していることです。だから初期の頃の考え方を反映して、わたしは漢民族の宗教についてはまとめています（渡邊 1991）。しかしさらにわたしの考え方は進んでいて、「華」の次元が客家研究によってわかるようになったわけです。「漢化」という言葉ではなくて、わたしは「華化」という概念を使いたい。日本には漢民族が影響した文化があるのではなくて、「中華」に由来する文化が日本に影響してきたと考えるわけです。例えば日本の国旗なんか見てください。「天円地方」の記号、「丸い赤（陽）と四角い白（陰）」という記号。これは「中華」のもっとも象徴的な形ですよね。こういう記号こそ、古来中華の象徴とされてきたわけで、その点を日本人は知らないわけですが。そういう客家の人たちから話を聞いたその内容自体が、中華と日本を含めた共通した文化＝文明の説明になっている。

ちょうどわたしが台湾に赴いた時代の、戒厳令下の生活の話はいたしました。国民党の開発独裁の時代でありましたし、しかも日本国自らも台湾と断交した情けない時代でありまして、わたしのような外国人の調査にとっては非常に過酷な時代でしたけれども、しかしわたしにとって嬉しかったのは、そんな過酷な時代でも民家に泊めてくれた暖かい心の人びとがいたということですね。言ってみれば、台湾の人たち自体には心の国境がなかったわけです。国境がないということは実は、「中華」という概念で理解ができる。台湾では、客家の人びとは知識人が多かった。多かったから中華文明の知識を体現していたかもしれない。だから中華文明の知識を以て、さまざまなことを、わたしに教えてくれたんだということを、いま自覚しています。

それから、すでにお話ししましたように、わたしはもちろん客家の研究だけじゃなくて、同時にその後に、香港水上居民やマレーシア華人のフィールドワークをしたわけですが、それら非客家地域といわゆる客家地域とに共通する文化について、山ほど理解ができたわけです。台湾で何度目かの調査をしている途中、そもそも「中国大陸に行って研究してみなさい」と言ってくれたのは、客家の六堆の人たちだったんです。だからわたしは1992年に初めて大陸中国行って、調査研究をすることができました。大陸に行って、ますます客家の人たちに学んだことが理解できるような状態になってしまったわけですね。わたしはいま日本で風水研究をよくやっていて、言ってみれば日本における研究の開発者みたいな立場にありますが、再び強調したいのは、これはもともと客家の人たちが強調してわたしに説明してくれた「客家文化」（客家人の自画像）なのです。風水思想はヨーロッパの人たちだって学ぼうとしてきたわけですから、いってみればグローバル化の問題につながってくる研究対象になっているわけです。

漢民族研究を中心に紹介しますと、わたしの本は幸い中国語に翻訳されております。『漢族的民俗宗教』（渡邊 2000a）。台湾で出版されていますのでぜひとも読んでほしいと思います。しかし出版社がなくなってしまい、いま売ってないかもしれません。それから『東方社会之風水思想』（渡邊 1999）という、これは日本では風水研究の最初の本として出版された本です。いわゆる日本人によって書かれた戦後最初の本ですけれども、それも翻訳されております。それから風水研究の本はずっと出版され続けてきて、『風水──気的景観地理学』（渡邊 2000b）という本も出版されているわけですね。

それから日本語版でこれも客家の人たち中心とした『漢民族の宗教』という本を、すでに触れましたように1991年に出版いたしました。本の内容として翻訳本では「民俗宗教」という概念を本のテーマに使っているわけで、それ自体も中国や台湾では新しい概念と思いますが、この本が翻訳されています。さてこれ、まだ翻訳されてないんですが『風水の社会人類学』という2001年に出版した本（渡邊 2001）があります。この本は、わたしの博士論文ですけれども。とうぜん客家研究から始まっています。研究の視点を世界に広げた本です。それから、つい最近出版した本ですけれども、「術」という漢民族

の概念から漢民族の文化を見てみようとした本です（渡邊 2017）。漢民族の考え方というのは宗教も何も「方法論」が非常に豊かで、しかも考え方も相対的な哲学である。生活法もまた、そういうものがあるということで、日常生活の中から漢族の哲学を理解しようとした本なんです。これも客家の研究から始まったわけです。

　ということで、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

参照文献

〈日文文献〉
林浩
　1996 『アジアの世紀の鍵を握る客家の源像』藤村久雄訳，東京：中央公論社。
松崎仁三郎
　1935 『嗚呼忠義亭』［私家版］
渡邊欣雄
　1991 『漢民族の宗教』東京：第一書房。
　1993 『世界のなかの沖縄文化』那覇：沖縄タイムス社。
　2001 『風水の社会人類学』東京：風響社。
　2017 『術としての生活と宗教』東京：森話社。

〈中文文献〉
陳運棟
　1978 『客家人』台北：聯亞出版社。
羅香林
　1933 『客家研究導論』広州：希山書蔵。
渡邊欣雄
　1999 『東方社会之風水思想』楊昭訳，台北：地景企業股份有限公司。
　2000a 『漢族的民俗宗教』台北：地景企業股份有限公司。
　2000b 『風水 ―気的景観地理学』索秋勁訳，台北：地景企業股份有限公司。
鍾壬壽（編）
　1973 『六堆客家鄉土誌』屏東：常青出版社。